

論 文

ミザクのプラグマティズム思想史解釈の批判的検討

——包括的プラグマティズム思想史構築に向けて——

加 賀 裕 郎

同志社女子大学  
現代社会学部・社会システム学科  
教授

A critical examination of Misak's interpretation of the  
intellectual history of pragmatism

—— Toward the inclusive intellectual history of pragmatism ——

Hiroo Kaga

Department of Social System Studies,  
Faculty of Contemporary Social Studies, Doshisha Women's College of Liberal Arts,  
Professor

**Abstract**

The main purpose of this paper is to find a clue to create the inclusive history of pragmatism by examining Misak's new study on this subject. The trait of Misak's version of the intellectual history of pragmatism consists in legitimating Peirce's pragmatism while as degrading James' pragmatism. And also she grasps pragmatism as a part of modern analytic philosophy, not as a development of German idealism. Four subjects are set up in order to achieve the purpose of this paper.

First we survey the main types of the interpretation of the intellectual history of pragmatism, and position Misak's new research in them. Next, we adjudicate whether Peirce's pragmatism can be justified as representative of pragmatism in general in comparison with James' pragmatism. Third, we critically consider Misak's interpretation of the intellectual history of pragmatism. Finally, we specify the configuration of the interpretations of the intellectual history of pragmatism by analyzing pragmatist's conception of truth.

Our analysis of these four areas leads to the conclusion that Misak's interpretation can not be justified. We would like to construct the history of pragmatism as efforts to integrate naturalism and historicism.

## 序論—課題設定

我われは先の論考で、近年のプラグマティズム思想史研究をサーベイした<sup>1)</sup>。このサーベイで特に留意したのは、古典的プラグマティズムと言語論的転回 (the linguistic turn) 以後の分析哲学的なプラグマティズムを、ある程度包摂するプラグマティズム思想史の解釈枠組みを構築することであった。何故ならプラグマティズム研究の何処に軸足を置くかによって、古典的プラグマティズムに偏った解釈、あるいは言語論的転回以後の分析哲学的プラグマティズムに偏った解釈が見られることに、問題を感じてきたからである。1860年代に作られた「形而上学クラブ」に端を発し<sup>2)</sup>、現代まで続くプラグマティズムには、方法論や強調点の変化を超えて、一定の思想の一貫性が認められる。

本論の目的は、プラグマティズム思想史研究の最新の成果である、Ch. ミザクの『アメリカのプラグマティスト』<sup>3)</sup>におけるプラグマティズム思想史の解釈枠組みを批判的に検討・評価すること、またそれを通してプラグマティズム思想史解釈に関する知見を深めることである。

この目的を果たすために、第一章では、我われの視座から、従来のプラグマティズム思想史研究における代表的な解釈枠組みを分類整理し、従来の解釈枠組みにおけるミザクの位置を暫定的に提示する。我われはミザクの提示する解釈枠組みを「パース主義的」と特徴づける。

第二章以下では、この解釈枠組みの意味を分析し、その妥当性を吟味、評価する。先ず第二章ではプラグマティズム思想史解釈の理念型として、パース主義、ジェイムズ主義、デューイ主義の三つに区分し、各々の特徴と相互関係について検討する。ミザクの特徴は、パース主義的なプラグマティズムとジェイムズ主義的なプラグマティズムを鋭く区別した上で、後者を排撃する。その意味と問題点を指摘することになるだろう。

第三章ではミザクのパース主義的なプラグマティズム思想史解釈の特質が検討対象になる。

ミザクはプラグマティズムを主に自然科学の哲学的分析の理論と解釈し、その観点からプラグマティズムと論理的経験主義の思想的親近性を強調する。この観点からミザクは、プラグマティズムが20世紀半ば—デューイの死後—に衰退し、R. ローティの『哲学と自然の鏡』とともに復活したという再生モデル、または衰退モデルを否定し、パースから Ch. モリス、C. I. ルイス、W. V. O. クワイン、W. セラーズと続く正統的プラグマティズムが一貫して活力を保持していたと主張する。第三章では、このミザクの解釈を批判的に検討する。

第四章ではミザクによるパースの真理概念解釈と、他のプラグマティズム思想史解釈における真理概念解釈の比較検討を通して、ミザクのプラグマティズム思想史解釈の特徴と問題点をさらに深く追求する。何故ならミザクのパース主義的プラグマティズム思想史解釈では、ある意味でパースの真理概念が中心に置かれているからである。

## 第1章 プラグマティズム思想史解釈の諸類型

本章の課題は、有力なプラグマティズム思想史解釈を分類・整理しつつ、ミザクの解釈をその中に暫定的に位置づけることである。古典的プラグマティズム解釈としては、B. ラッセルとか M. ハイデガーに共通の「19世紀前半のイギリス功利主義の、19世紀後半におけるアメリカでの反響」、「利害得失の比較という還元的レンズを通してあらゆるものを見る粗野な商人の感性」<sup>4)</sup> というものがあるが、今日ではこの解釈は通用しない。我われは以下で、現在でも一定の説得力をもつ、若干のプラグマティズム思想史解釈を提示したい。

第一に、最近のプラグマティズム思想史的解釈としては L. メナンドのものがよく知られている<sup>5)</sup>。メナンドの解釈を一言で表せば、プラグマティズムは「絶対主義への反動である」ということになる。メナンドは、プラグマティズムのこのような特性が、南北戦争の教訓から生

じたと考える。その教訓とは「確実性は暴力に至る」ということである。この教訓からプラグマティズムは可謬主義、多元主義、経験主義、反デカルト主義などという特徴をもつことになった。

J. クロッペンバーグは「絶対主義への反動」というプラグマティズムの特性を、南北戦争よりも広く、近代思想の19世紀末段階での到達点を表象する「不確実性の勝利」と捉える<sup>6)</sup>。クロッペンバーグは19世紀後半以降に活躍した、ヨーロッパとアメリカ合衆国の一団の哲学者を「中道の哲学者 (philosophers of via media)」と呼ぶ。「中道の哲学者」には W. デイルタイ、A. フイエ、T. H. グリーン、H. シジウィック、ジェイムズ、デューイなどが含まれる。ここで「中道」とは、これらの哲学者が19世紀哲学公認の対立概念、つまり認識論における観念論と経験論、倫理学における直覚主義と功利主義、政治学における革命的社会主義と自由放任的自由主義の中道を目指したという意味である。彼らはカント的な現象界 (phenomena) と可想界 (noumena) の区別を統一しうる「アルキメデスの点」への多様な追求、つまりスコットランド実在論の常識、ロマン主義の直覚、観念論の精神、実証主義の科学が、いずれも失敗したと考えた。そこで彼らは「アルキメデスの点」への探求を放棄し、根元的に偶然的、未完結、不確実である人間の生の現実に立ち返り、そこを起点にして前述した様ざまな二元的区別を克服しようとした。メナンドとクロッペンバーグに共通している解釈は、プラグマティズムを反絶対主義、反合理主義—ここで合理主義は、経験から独立に真である知識が存在すると主張する立場と規定される—と捉えるものである。

第二の解釈としては、R. B. ブランダムのものが挙げられる。ブランダムはメナンドとクロッペンバーグのそれと矛盾するものではないが、プラグマティズムを「第二の啓蒙」として捉えることに特徴がある<sup>7)</sup>。「第一の啓蒙」は18世紀ヨーロッパに起こった。そこでの学

問上のパラダイムはニュートン力学であり、その鍵概念は普遍性、必然性、永遠性であった。いっぽう「第二の啓蒙」の学問上のパラダイムはダーウィンの進化論的生物学であり、その鍵概念は可謬主義、多元主義、法則の確率的・統計的性格であった。

ブランダムはプラグマティズムを南北戦争に対する知的反応とするメナンドの解釈を支持する。したがってその知的反応の内実が「第二の啓蒙」として同定されることになる。「第二の啓蒙」としてのプラグマティズムの思想的特質は次の通りである。①ダーウィン主義、進化論的自然主義、②存在論的自然主義と結びついた経験主義、③ 'Erfahrung' としての経験概念、表象 (representing) と介入 (intervening) の一体的把握、④認識論の問題に対する意味論的問題の優先、⑤学習における役割として概念内容を理解、⑥概念内容についての機能主義、⑦理論的認識に対する実践的認識の優先。ブランダムにとって①～⑧の思想的特質は、古典的プラグマティズムから現代のプラグマティズムまで、ある程度一貫している。

ブランダムは解釈のもう一つの特徴は、プラグマティズム思想史をカント、ヘーゲルを中心とするドイツ観念論の展開と捉えることである。ブランダムによれば、カント以前の合理論と経験論は、意識と経験の文法上の最小単位を名辞としたが、カントは判断だとした。文法的に言えば、合理論は述語主義である。それは述語の分析から現実存在についての主張が導出されると見なす。逆に経験主義は主語主義である。それは主語の分析から属性や本質についての主張が導出されると見なす。それに対してカントは直観の欠けた概念は空虚であり、概念の欠けた直観は盲目であると主張した。つまり意識と経験の最小単位は感覚的経験と概念の合成体である。こうして認識は理性空間のなかに定位される。また我われは判断を下すことによって、その判断の真偽、是非にコミットし、責任を負う。ブランダムはこうしたカントによる「規範的転回」を評価し、「還元的—記述的な性

向行動主義」を否定する。

ブランダムによれば、カントは原型的なプラグマティストである。つまりカントは「内容を力によって」、概念内容を概念の機能によって理解する。これはまた 'knowing that' を 'knowing how' によって、「意味の理論」を「使用の理論」によって捉えることを意味する。カントは我われの概念活動に暗々裡に含まれる概念規範を陽表面化しようとした。その際、当該規範は無世界的、非歴史的妥当性を有すると見なされた。それに対してヘーゲルは当該規範が公共的、歴史的な社会的認識実践を通して形成され、妥当性を獲得していくと見なした。ヘーゲルは当該規範の公共的、歴史的な形成過程を「経験 (Erfahrung)」と呼んだ。これは古典的経験主義の「体験 (Erlebnis)」「感覚 (Empfindung)」とは異なり、理性的な推論空間で展開される学習過程を意味する。

ブランダムに近いプラグマティズム思想史解釈は、R. バーンスタインにも見ることができ。バーンスタインは論文「ヘーゲルとプラグマティズム ("Hegel and Pragmatism")」のなかで、アメリカ哲学史でヘーゲルが関心をもたれ、議論された時期として19世紀後半、20世紀半ば、現代を挙げ、各々がプラグマティズムと関係していると述べる<sup>8)</sup>。19世紀後半におけるヘーゲルへの関心とは、主に古典的プラグマティストに見られるものである。若きデューイがヘーゲル主義者だったことはよく知られているが、バーンスタインはパースとジェイムズにも、一定程度ヘーゲルの影を見てとる。多元論はジェイムズ哲学の基本的主張であり、その意味でヘーゲルの一元論的立場はジェイムズにとって最大の敵と言ってよい。しかしバーンスタインは、ジェイムズの本当の敵はヘーゲルよりも、観念論者J. ロイスのほうだと述べ、さらにヘーゲルの「経験と実在の生動的な性質」<sup>9)</sup>の思想とジェイムズの思想は近い関係にあると指摘する。しかしジェイムズの反ヘーゲルの論調の影響は大きく、20世紀前半を通してヘーゲルが顧みられることはなかった。

この事情が変わり始めたのは1950年代である。バーンスタインによれば、その変化の一つは政治的であり、ニューレフトとともに訪れた。ニューレフトを通して初期マルクスが再発見され、またG. ルカーチ、A. グラムシ、フランクフルト学派の背後にあるマルクス主義的伝統が発見された。「ヘーゲルはアドルノとマルクーゼの目を通して見られた」<sup>10)</sup>のである。

二つめは、二十世紀半ばに哲学界の主流を占めた分析哲学の技術主義的・専門主義的方向性に不満を覚え、人間の文化と経験の問題に関わろうとする人びとがヘーゲルの影響を受けたことである。具体的にはCh. テイラー、A. マッキンタイア、R. バーンスタインなどである。

三つめは、W. セラーズである。セラーズは二十世紀半ばに活躍した分析哲学者であるが、長い間、注目されることが少なかった。しかしセラーズは二十世紀の後半になって再発見され、現代の「ピッツバーグ・ヘーゲリアン (Pittsburgh Hegelians)」であるプラグマティスト、ブランダムとかJ. マクダウェルに影響を及ぼした。以上のようにブランダムとバーンスタインは、プラグマティズムをドイツ観念論の発展形態として解釈する<sup>11)</sup>。

さてプラグマティズム思想史に関する第三の解釈枠組みはJ. ハーバーマスによるものである。ハーバーマスはプラトンを出発点として、アウグスチヌスやトマスを経てドイツ観念論に至る哲学的理想主義の系譜を「形而上学的」と規定する<sup>12)</sup>。形而上学的思考の特徴は①同一性の思考 (Identitätsdenken) ②イデア説 (Ideenlehre) ③強い理論的概念 (der starke Theoriebegriff) である。簡潔に述べると、①は多様性の根底に自己同一的実在を仮定して、それを求める思考、②は自己同一的実在を理念的なものと同じ視すること、③は自己同一的実在の認識のために観想的 (theoretisch) な態度を重視することである。

近世以降の哲学はプラトン主義的前提を堅持しながらも、それに意識哲学 (Bewußtseinsphilosophie) 的な捻りを加えた。

意識哲学的転回以降、①と②は自己意識の同一性という観点から捉えなおされ、自己意識は世界の可能性の制約を定める超越論的主観性、あるいは自然と歴史を貫いて自らの同一性を取り戻す精神とされた。

ハーバーマスのよればプラトン主義的な形而上学的思考はドイツ観念論を頂点として解体に向かった。その解体過程を略述すれば、次のようになる。先ず世界全体とその統一に向けられた思考は、17世紀における自然科学の経験科学的方法、18世紀における立憲国家の諸制度および道徳-法哲学における形式主義によって「手続き的合理性 (Verfahrensrationalität)」に変化した。19世紀になると歴史意識が強まり、観念論的な脱状況的理性に対して「有限性の次元」が対置され、根本概念の「脱超越論化 (Detranszendentalisierung)」が生じた。19世紀には科学と技術に関する客観主義的理解と人間関係や生の諸形式に関する物象化、機能化批判が起こり、これが主観-客観図式への批判と結びついた。そしてこの批判から意識哲学から言語哲学へのパラダイムシフトが起こった。ハーバーマスにとって、哲学の言語論的転回は語用論的転回を意味する。哲学は発話状況、コンテキスト、発話者の要求や態度などといった前客観的、実践的狀況を考慮せざるを得なくなり、結果的に理論連関は実践的な発生連関や使用連関に組み込まれる。こうして形而上学的思考の「強い理論的概念」は維持できなくなる。

意識哲学の解体、認識主観の脱超越論化つまり超越論的主観を社会的空間と歴史的時間に埋め戻す運動は、ヘーゲルに始まり20世紀哲学に至る。すなわち「フンボルト、パース、ディルタイ、カッシーラー、ハイデガー、およびウイトゲンシュタインは、言語、実践ないし生活形式を理性の具体化の象徴的媒体として把握しようとする彼らの企てにおいて、ヘーゲルの影響下にあったし、ウイトゲンシュタインの場合のように、ヘーゲルの影響を受けてもよかったであろう」<sup>13)</sup>。ハーバーマスにとってプラグマティズムは、ポスト形而上学時代の哲学的形

態の一つである。とりわけ、哲学の言語論的転回においてはパースが、言語論的転回の社会的コミュニケーションの次元においてはミードが、社会的コミュニケーションの政治的展開においてはデューイが、ハーバーマスにとって重要なプラグマティストになる。

最後にプラグマティズム思想史解釈の第四の類型として、R. ローティによる解釈を挙げよう。ローティの解釈は、プラグマティズムをポスト形而上学的思考の一形態とする点ではハーバーマスと重なり合いながら、ハーバーマスの解釈を極端化したものだと言えるであろう。

ローティは、ハーバーマスの言う形而上学的思考をプラトン主義と同一化する。プラトン主義は「我われの認識と我われの言語に依存しないが、我われの言語によって適切に表象しようとする何かが存在する」<sup>14)</sup>と唱える。プラトン主義に対する最初の一撃はカントによって加えられた。何故ならカントは認識を「實在の精確な表象」から「表象連関の秩序づけ」に変えたからである。その結果、知識の客観性の問題は言明と世界の対応ではなく、表象連関の秩序づけの客観性の問題になる。前述したブランダムとローティは、カントを元祖プラグマティストと見る点では共通している（ブランダムはローティの弟子である）。しかしブランダムが合理主義的プラグマティズムを指向するのに対して、ローティはプラグマティズムを反合理主義に結びつけようとする。ネヴォに従うならば、プラグマティズムは一般に科学の正当化を中心課題とし、その主流的動向が非基礎づけ主義から全体論へと展開するのに対して、ローティはハイデガーに近づき、非基礎づけ主義から反理論へ、さらにはロマン主義的な混沌、時間性、文化の称揚に向かった<sup>15)</sup>。ローティの思索を追跡してみよう。

カントは知識を表象連関の秩序づけの問題に還元した。その結果「世界が言明Sを真にする」という表現は無効になり、「真理は発見されるのではなく、作られる」という考えが出てくる。ドイツ観念論は芸術、道徳だけでなく自然科学

もまた発見の対象ではなく、未だ自己意識に到達していない中間段階の精神を記述したものだと考えた。しかしドイツ観念論は芸術、道徳、自然科学は「作られるもの」だが、精神や自我は発見されるべき本質をもつと見なした。つまりドイツ観念論は芸術、道徳、自然科学に関してプラトン主義を放棄したが、精神や自我に関してはプラトン主義を保持したのである。

ドイツ観念論以後の哲学、例えば歴史主義や生の哲学になると精神や自我が社会や歴史につねに既に巻き込まれ、またその中で形成されることが自覚されるようになる。こうなるとプラトン主義が全面的に無効化する。ローティにとってプラトン主義以後の哲学—大文字の哲学(Philosophy) 以後の哲学(philosophy) —の代表的事例はニーチェとプラグマティズムに求められる。発見されるべき本質を欠いた偶然的な世界につねに既に巻き込まれた人間は、不断に新しいボキャブラリー、自我、共同体を創造し続ける他ない。ニーチェにとって創造は個人的であるが、プラグマティズムにとっては民主的連帯による創造である。

以上我われは、プラグマティズム思想史解釈の枠組みに関して有力と判断されるものを四つに区分して概観した。再確認しておこう。①メナンドやクロッペンバーグの解釈に見られるように、「確実性の探求」の企てが無効化した後、偶然性、未完結性、不確実性を特質とする経験の低地に降り立ち、そこを起点として19世紀哲学の二項的対立図式を超えようとする営み②ニュートンの自然哲学をパラダイムとする第一の啓蒙に対して、ダーウィンパラダイムとする第二の啓蒙③ポスト形而上学的思考、哲学の脱超越論化の一形態④プラトン主義以後の、大文字の哲学以後のポスト哲学の一形態。①はメナンド、クロッペンバーグなどに、②はブランダム、バーンスタインなどに、③はハーバースなどに、④はローティなどに見られる解釈である。

これら四つの解釈は必ずしも対立するわけではない。多くの解釈では、プラグマティズムは

ドイツ観念論の発展形態と捉えられる。ハーバースはカントを、ローティとブランダムはヘーゲルを重視しているように思える。また多くの解釈では、ポスト形而上学的思考、反プラトン主義、確実性の探求の終焉といった視角からプラグマティズムを解釈する。また特定の哲学者だけをプラグマティズムの範型としてプラグマティズム思想史を構築するものは少ない。例外はローティの解釈である。ローティはパースのプラグマティズムを排撃する。すなわち「パースのプラグマティズムは、それに名前を与え、ジェイムズを触発しただけに過ぎない。パース自身は依然として最もカント的な思想家—他のあらゆる言説の種類がその適正な位置と地位に割り当てられるような、すべてを包括する非歴史的な脈絡を哲学が与えるということを感じ切っていた人だった」<sup>16)</sup>。

以上のようなプラグマティズム思想史解釈の傾向と比較すると、ミザクの最新の研究には他にない特色が認められる。その詳細と、ミザクの解釈に対する我われの評価は次章以下で行うとして、本章では暫定的にミザクの解釈を特徴づけておく。

ミザクの解釈の第一の特徴は、パースのプラグマティズムをプラグマティズムの正統とし、ジェイムズとデューイ、就中ジェイムズをプラグマティズムの正統から排除することである。ミザクのジェイムズ排除は徹底しており、ローティのパース排除と好対照をなす。第二の特徴としては、前述したプラグマティズム思想史解釈の四類型が、プラグマティズムをドイツ観念論の発展形態と捉える傾向にあり、また「確実性の探求」終焉以後の哲学だと捉えるのに対して、ミザクはプラグマティズムを経験主義—特に20世紀前半の論理実証主義、論理的経験主義—と結びつけ、「プラグマティズムと論理的経験主義の間には、はっきりした断絶などない」<sup>17)</sup>と解釈する。プラグマティズムは、近代分析哲学の発展の一翼を担うものとして解釈される。

第三の特徴は、プラグマティズム思想史解釈

の多くが、その思想史を衰退と再生の物語として描くのに対して、ミザクはプラグマティズムの一貫した発展史を構想していることである。ここで「衰退と再生の物語」とは、20世紀半ばに一旦プラグマティズムが衰退し分析哲学が興隆したが、20世紀後半、プラグマティズムが再生、発展を遂げつつあるという物語である。ミザクはこの物語には与せず、パースを正統とするプラグマティズムが、20世紀半ばから後半にかけても一貫して発展したと解釈する。メナンド、クロッペンバーグ、ハーバーマス、ブランダム、バーンスタインの解釈をプラグマティズム思想史研究の中道派とすれば、ローティはその左派、ミザクはその右派に位置づけられるであろう。

以下の諸章では、この暫定的なミザク解釈を肉付けし、精査し、批判的に評価する。先ずミザクがジェイムズやデューイ、特にジェイムズをプラグマティズムの正統から排除する理由を精査するとともに、この点に関する我われの見解を述べてみたい。

## 第2章 ジェイムズのプラグマティズムの排除

プラグマティズム思想史解釈の諸類型のなかで、特定のプラグマティストだけを正統と認めるものは少ない。前述のように例外の一人はローティである。ローティはパースをプラグマティズムの正統から除外する。その理由は次の通りである。

ローティの哲学的テーゼの一つはカント批判—哲学が科学、道徳、芸術等々の文化的諸領域を評価し裁可する規範に関わる裁判官的機能をもつとする考え方に対する批判—である。ローティにとってパースや分析哲学はカント的問題設定を引き継いでいる。具体的に言うと、論理学、倫理学、美学から構成されるパースの規範学は、明らかにカントの三批判を下敷きにしてある。また分析哲学は表象を心的なものから言語的のものに変え、超越論的批判や心理学ではなく言語哲学を知識の基礎づけに関わる学問と

する、カント哲学の変種である<sup>18)</sup>。

『哲学と自然の鏡』において、ローティはH.G. ガダマーの解釈学に依拠しつつ、カント的な哲学像を変えようとする。解釈学的観点から、客観性とか真理は「自己形成 (self-formation)」「教育 (education)」「陶冶 (Bildung)」「啓発 (edification)」という大きな枠組みのなかで理解される。そうすると客観性とか客観性の内実である社会実践の自覚は「陶冶される (gebildet)」ための第一段階であって、ここでは「我われは自ら自身を即自 (en-soi) として見なければならぬ」<sup>19)</sup>。この第一の段階から対自 (pour-soi) 的な第二段階が発生する。それは第一段階に寄生しつつ、既存の規範に対して意識的に距離を置く段階である。ローティはこれら二つの段階の区別を一般化して、第一段階を認識論中心で構築的な「体系的哲学 (systematic philosophy)」、第二段階を認識論に疑念を抱く「啓発的哲学 (edifying philosophy)」とする<sup>20)</sup>。

ローティにとって、カント、パース、分析哲学者は即時的な第一段階に相当する体系的哲学者であり、それに対してゲーテ、ケルケゴール、サンタヤナ、ジェイムズ、デューイ、後期ウイトゲンシュタイン、後期ハイデガーは、「人間の本质は本质を知る人だ」という概念を疑う、対自的な第二段階の「啓発的哲学者」である。ローティは「啓発的哲学者」について次のように述べる。

彼らは、今世紀の「迷信」は前世紀の理性の勝利だったという歴史主義的意識とともに、最新の科学的成果から借りた語彙は本質の特権的表象を表わしているのではなく、世界が記述されるさいの潜在的には無限にある語彙の中のもう一つのものに過ぎないかもしれないという相対主義的意識を生き生きとしたものにし続けてきた<sup>21)</sup>。

ローティにとってプラグマティズムは「啓発的哲学」の代表的類型の一つである。ただしプ

ラグマティズムにおける「啓発的哲学者」はジェイムズとデューイであり、パースは除外される。

ミザクのプラグマティズム思想史解釈は、ローティの解釈とは正反対に、プラグマティズムを「近代分析哲学の進化」という観点から解釈する。この解釈に立てば、パースは近代分析哲学の一翼を担っており、ジェイムズはプラグマティズムの正統から外される。こうしてローティとミザクのプラグマティズム解釈、ジェイムズ解釈はポジとネガの関係にある。そこでミザクがジェイムズとデューイ、とくにジェイムズをプラグマティズムの正統から除外する理由が問われることになる。

第一にミザクは、ジェイムズによる「プラグマティズムの格率」の受け入れ方を問題にする。ちなみに「プラグマティズムの格率」は「実践的関わりをもつと考えられるようなどんな結果を、我われの概念の対象がもつかを考えよ。その時、これらの対象についての我われの概念が、その対象についての我われの概念の全体である」と定式化される。つまり概念の意味とは、一定の操作とその操作の結果の定式化から構成される。ジェイムズはこの格率を特殊主義的に、つまり特定の時と場所で、特定の人物が経験する操作と結果と解釈した。

ジェイムズのプラグマティズムには「個別性または主観性」が組み込まれており、それが彼の真理概念に反映されている。「プラグマティズムの格率」を「真理」に適用すると、「言明 p は真である」は、差し当たり「もし p に基づいて行為すれば、p は望ましい結果を生じる」と敷衍される。ジェイムズはこの意味を特殊主義的に、つまり「今、ここで」p に基づいて行為すれば、「あなたと私」に望ましい結果が生じると解釈した。したがってジェイムズは、実際に言明 p が我われを望ましい結果に導きつつあるときに、言明 p が「真になる (becomes true)」と言い、それを一般化して、真理とは「真理が自らを真にする (verify itself) 過程、真理の真理化 (verification) の過程であ

る」<sup>22)</sup>と述べる。

さらにジェイムズは、前述の真理概念における「望ましい結果」を、言明 p に基づく行為から生じる客観的結果ではなく、時として「あなたと私」に生じる個人的な幸福の意味に捉える。このようなジェイムズの「根本的主観主義 (radical subjectivism)」<sup>23)</sup>は、彼の「信じる意志 (“The Will to Believe”)」に典型的に現れる。ジェイムズはフランスの主意主義的なカント主義者ルヌヴィエの影響を受けた。カントにとって自由、不死、神存在の問題は理性によって解決できず、実践理性の要請の問題とされるべきであった。ルヌヴィエとジェイムズは、カント以上に徹底しており、知的、道徳的活動及び信仰は究極的に「信じる意志」に依拠すると見なした。すなわち「我われのすべての科学のおよび哲学的理想は、未知の神々への祭壇である」<sup>24)</sup>と。

「信じる意志」は、神存在のような決定的な証明や反駁手段が欠けている問題に関して、証拠が揃うまで判断を差し控えるのではなく、神存在を信じる権利を主張した論文である。このような解釈だと、信仰の問題では理性とか証拠は不適切だとするウィトゲンシュタインとジェイムズが近い立場であるように見える。しかしミザクは、この解釈を取らない。ミザクにとって「信じる意志」は証拠主義の限界を見定めようとするのではなく、ある言明を信じることから生じる主観的満足も、その言明の妥当性を保証する証拠と見なすこと、つまり証拠主義の拡張を目指している。

ジェイムズの立場は「根本的主観主義」に立脚するプラグマティズムである。パースのプラグマティズムは、明らかに根本的主観主義に立脚するものではない。ミザクとともにパース主義的プラグマティズムに依拠する R. B. タリスは、ジェイムズとパースの違いを次の二点に纏めている。第一は、ジェイムズはパースの格率を拡大解釈して、ある言明の実践的結果のうち、その言明を信じることの心理的結果を含めたことである。第二にパースにとって「プラグ

「プラグマティズムの格率」は観念を明晰化する方法であって、特定の哲学的、形而上学的主張を伴立するものではないが、ジェイムズはプラグマティズムを一定の哲学的、形而上学的主張と結びつかせる<sup>25)</sup>。以上のように、ミザクやタリスにとってパースのプラグマティズムは観念明晰化の方法に過ぎず、「プラグマティズムの格率」の適用によって、一部の哲学的、形而上学的主張を無効にする。それに対してジェイムズはプラグマティズムに主観主義を導入すると同時に、プラグマティズムから一定の哲学的、形而上学的主張を導出する。

これまでの考察を一言で纏めるならば、ミザクやタリスが排除するジェイムズ的プラグマティズムの中心には、ジェイムズの特種主義、根本的主観主義がある。それではミザクやタリスのジェイムズ排除は妥当なのであろうか。我われの見解を述べよう。

19世紀後半から20世紀前半にかけての我われの哲学史の見取り図を描けば、先ずドイツ観念論以後、19世紀を通じて精神や自我に関してプラトン主義を維持することは、次第に困難になっていった。歴史主義と生の哲学は超越論的主観に代えて、生、伝統、美的経験、身体的・社会的・歴史の実存を置いた。フッサールは超越論的自我をその時々現象学者の事実認識と同一化し、ハイデガーは産出的主観性を歴史性と個人性にある現存在と同一化した<sup>26)</sup>。この大きな流れは、超越論的主観が歴史的、社会的生の内に織り込まれ、その中で自らを形成、創造するものと見なされることを意味する。この大きな流れは「ポスト形而上学的」「脱超越論化」と形容される。ただしこの流れは直線的にではなく、前進と後退を繰り返しながら進んだ。我われの見解ではこの流れをさらに進めようとした人びとには、ニーチェとハイデガー、ジェイムズとデューイがおり、その流れに一定の歯止めをかけようとした人びとにはパースとフッサールがいる。この見取り図から見ると、ミザクのジェイムズ批判は「ポスト形而上学的」「脱超越論化」に対する消極的反応

と見なすことができる。

ジェイムズの真理概念に、ミザクやタリスが批判する特殊主義的、主観主義的側面があるのは事実である。デューイも、ジェイムズの真理概念が、時として「観念の意図の満足」ではなく、「観念を信じたときの心理的満足」を含むことを批判する<sup>27)</sup>。しかしジェイムズのプラグマティズムを、パースのプラグマティズムの誤解とか、特殊主義や主観主義によるパース的プラグマティズムの歪曲としてだけ捉えるのは、ジェイムズに対して公平ではない<sup>28)</sup>。

ジェイムズは知識体系と実在の構成に「人称的なもの (the personal)」を持ち込んだ。知識、存在、道徳の問題に関して、哲学的伝統は専ら「非人称的なもの (the impersonal)」を求めてきた。ジェイムズはその伝統に「人称的なもの」を導入したのである。しかもジェイムズは「非人称的なもの」を犠牲にして「人称的なもの」を導入したのではない。H. パトナムはジェイムズにおける「人称的なもの」と「非人称的なもの」の関係を、次のように説明する。すなわちジェイムズは論理実証主義者のように発見の文脈と正当化の文脈を区別し、発見の文脈に関しては決断、選択 (人称的なもの) の重要性を、正当化の文脈に関しては証拠 (非人称的なもの) の重要性を強調した、と<sup>29)</sup>。他に選択肢がなく、深刻であり、知的根拠に基づいて決定できない、知的、道徳的、宗教的問題に限り、人称的な選択、決断の権利が我われにはある、というのがジェイムズの主張である。自然の合法則性、自由、神の存在、魂の不死などは証拠に基づいては決定できない。しかし我われが何を選択するかは、我われの生と世界に重大な結果をもたらす。その決断にあたって「人称的なもの」の満足が重要な意味をもつ、というのがジェイムズの基本的立場である。我われの見解では、ジェイムズの人称主義的プラグマティズムは現代哲学においても十分に消化されていない問題を提起している。少なくともジェイムズの問題提起を除外するようなプラグマティズム解釈は一面的である。

次にパース主義的なプラグマティズムとデューイ主義的なプラグマティズムの関係について、我われの見解を確定しておこう。ミザクはデューイをジェイズムほどには、正統的プラグマティズムから排除しない。その理由は、パースにとってと同様にデューイにとっても、「探求」が認識論や真理論にとって中心概念だからである。しかしミザクはデューイの高弟 E. ネイグルが、デューイの哲学を批判した「妥当性と論理的秩序の問題を起源と発展の問題と混同している」<sup>30)</sup> という言明を引用した後で、次のように述べる。

この僅かの違い [妥当性と論理的秩序の問題と、起源と発展の問題の違い—引用者注] は、本書で私が描く二種類のプラグマティストの境界線を印づける。一つの種類のプラグマティストの考えでは、我われの歴史と進化は、我われを現在のような解釈する機関に作り変える。そして我われは事実の真理から解釈を完全に引き離すことはできないけれども、それにも関わらず我われが解釈している事実は存在する。これはパースと、後に見るように C. I. ルイスである。他の種類のプラグマティストの考えでは、抽象によってさえも、我われの事実解釈から切り離されたものがあると言うことはできない。これはデューイ及び、異なった意味においてではあるが、ジェイズムとシラーである<sup>31)</sup>。

ネイグルやミザクが指摘する妥当性と論理秩序または解釈と、起源と発展または事実の真理の関係の区別または連続性の問題は、確かにパースとデューイの根本的相違に関わると言って差し支えない。その相違は自然主義に関わって現れる。デューイの論理学は「知識の自然史」である。ところがパースはデューイ宛書簡(1904年6月9日付)の中で、デューイの「知識の自然史」は規範的論理学の「思考」とは異なると指摘する。パースの論理学は経験的思考が従うべき規範についての学であるのに対し

て、デューイの論理学はせいぜい科学史や科学思想史だというのである。

ネイグルとミザクによれば、デューイは規範的論理学と知識の自然史を混同したことになる。しかしパースの批判にも関わらず、デューイが「知識の自然史」という概念を根本的に放棄した形跡はない。つまりデューイは規範的論理学と知識の自然史を混同したのではなく、發生的方法が知識についての最良の分析方法だと主張したのである。デューイにおける「知識の自然史」としての論理学という理念は、若い頃のヘーゲル研究から発展したものである。

デューイの論理学は自然主義的であるが、パースの規範学としての論理学は自然主義的というよりも、準-超越論的であるように見える。実際 R. W. スリーパーとか J. J. ストゥアといったデューイ主義的プラグマティストは、ミザクとは逆にパース哲学の非自然主義的性格を強く批判する<sup>32)</sup>。ストゥアは、パースの規範学としての論理学が最初から混乱しており、考え違いをしていると述べる。パースの規範学は個々の対象の真偽、善悪、美醜を判定するためのものではなく、真・善・美の本質を明らかにすることを目的とした本質学、理論学であり、実践的問題には直接かかわらない。パースは理論と実践、目的と手段、事実と価値、論理学と探求等の二元論に立っている。例えばパースの現象学は善悪の評価から独立に現象自体を分析しようとするが、それは事実と価値の二元論を前提しており、また形而上学から論理学を導出するのではなく、論理学から形而上学を導出しようとするが、それは論理学と実際の探求の二元論を前提している。ストゥアによれば、パースのプラグマティズム、スコラ的实在論、本質主義、理論中心主義は、プラグマティズムの観点からは多くの問題を孕む。

スリーパー、ストゥアといったデューイ主義的プラグマティストによるパース批判に対して、パース研究者である V. コラピエトロは、パースが超越論的哲学者ではなく「少々独特な自然主義者」であり、「進化したつある諸形式

の存在論と<sup>・</sup>内的<sup>・</sup>諸規範の論理学」を展開したと主張する<sup>33)</sup>。コラピエトロの解釈について検討しよう。

記号は経験において発生した生活形式であり、記号的推論の包括的本性は生活形式の歴史つまり規範の系譜学によって明らかにされる。当の生活形式は規範の系譜学から抽象され、それ自体として研究される。ただし記号的推論についての規範学的研究は規範の系譜学的研究から独立ではなく、規範の系譜学に埋め戻して理解される。つまり生物学的進化、規範の系譜学、記号的推論の規範科学は包括的全体をなしており、その限りでパースは自然主義者であった、というのがコラピエトロの解釈である。いっぽうデューイは『論理学—探求の理論』において、「知識の自然史」としての論理学を堅持しながらも、論理学の規範的性格を重視し、「論理形式は本質的に探求の、探求にとっての要請、探求自体の過程で発見された諸形式の定式化であり、もしそれ以後の探求が保証付きの言明可能性を帰結として生み出すべきならば、その探求が満足しなければならないものである」<sup>34)</sup>と述べる。もしコラピエトロの解釈が正しいとすれば、パースと『論理学—探求の理論』におけるデューイの相違は程度問題であるが、その違いが消えるわけではない。

本章ではプラグマティズムをパース主義的、ジェイムズ主義的、デューイ主義的という三つの理念型に区分し、各々の特徴と相互関係について検討した。ミザクがパース主義を採用し、ジェイムズ主義的及びデューイ主義的プラグマティズムを排除する理由は、前者に関しては特殊主義的、主観主義的な側面、後者に関しては自然主義的な側面に関わっている。しかし我われの見解では、ジェイムズの特種主義的、主観主義的な側面には、現在でも未解決の重要な哲学的問題提起が含まれており、デューイの自然主義は発生の問題と正当化の問題を混同したものではない。以上により、ミザクのようにパースのプラグマティズムをプラグマティズムの正統と捉えることには、十分な根拠がないと暫定

的に結論できる。

### 第3章 パース主義的な プラグマティズム思想史の枠組み

次に我われは、ミザクの主張するパース主義的なプラグマティズム思想史をさらに検討することによって、我われの暫定的結論を肉付けしていこう。

ミザクは「近代分析哲学の進化」という観点からプラグマティズム思想史を構築する。この捉え方だとプラグマティズムは科学の基礎づけを中心課題としつつ、それを非基礎づけ主義的、全体論的方向で解決しようとした思想である。

前章で考察したように、ミザクの解釈の第一の特徴は、パースをプラグマティズムの正統と認め、ジェイムズを正統から排除することであるが、第二の特徴は「プラグマティズムと論理的経験主義の驚くべき類似性」を認めることである<sup>35)</sup>。ミザクはこの類似性を二つの方向から説明する。一つは論理的経験主義者の主張が、プラグマティズムと区別できなくなるまで変化するということである。もう一つはプラグマティストの中に、論理的経験主義との接点になるような哲学者がいたということである。具体的には Ch. モリス、C. I. ルイス、さらに W. V. O. クワイン、W. セラーズである。ミザクによれば、これらの哲学者の系譜はパース主義的プラグマティズムの系譜であり、彼らを経由して現代の分析哲学的プラグマティズムに繋がる。

ミザクの解釈だと、プラグマティズムは論理的経験主義がアメリカ哲学界に流入して以降、一旦衰退し、20世紀後半になってローティヤパトナムといった分析哲学者がプラグマティズムに近づいて以降、復活したという、プラグマティズム思想史解釈は妥当ではない。プラグマティズムは論理的経験主義の中で生き続け、それが20世紀後半の分析哲学的プラグマティズムの発展につながったのである。以下では論理的経験主義の側からのプラグマティズムへの接

近とプラグマティズムの側からの論理的経験主義受容という二側面の検討から、ミザクのプラグマティズム思想史の骨格を明らかにしてみたい。

最初に論理的経験主義の側からのプラグマティズムへの接近について考えてみよう。1930年代、多くの論理的経験主義者はアメリカ合衆国に活動拠点を移した。彼らは自分たちの立場が受容される土壤がアメリカ合衆国にあることに気付いた。その土壤はプラグマティズムによって醸成された。

ミザクは二つの事例を挙げる。一つはR. カルナップ初期の『世界の論理的構造 (*Der logische Aufbau der Welt*)』である。カルナップはそこで二つの形式言語、つまりもの言語とセンス・データ言語を作り出し、言説全体がどちらの言語によって書かれることも可能であり、言語選択はプラグマティックな問題だと考えた。もう一つはP. W. ブリッジマンの操作主義である。操作主義は概念の意味が、それを実証する操作と、その操作の可能的帰結から構成されると主張する。これはパースによる観念明晰化の方法と類似した見解である<sup>36)</sup>。

以上の事例は、論理的経験主義が当初からプラグマティズムと類似していた証拠と見なすことができる。論理実証主義者の中には、アメリカに移ってから、さらにプラグマティズムに接近した人びとがいる。ミザクはカルナップとPh. フランクを挙げる。特にカルナップはC.I. ルイス、Ch. モリス、E. ネイグル、S. フックといったプラグマティストの影響を受けた。一例としてカルナップが内部的問題と外部的問題を区別した点を考えてみよう。内部的問題とは特定の概念枠組み内部で生じる問題であり、その問題は実証的に解決されなければならない。外部的問題とは抽象的な概念や信念、方法的原理、規制的原理などに関わる問題であり、その問題は「便宜、成果が上がる、言語が意図した目的に導くか」<sup>37)</sup>によって決まる。このカルナップの主張は明らかにプラグマティズムに近い。

もう一つの例を考えてみよう。論理的経験主義は分析言明と実証可能な言明によって合理的に再構成できるものを有意義な言明だとし、それが不可能な言明は疑似的言明だと見なした。疑似的言明には形而上学や倫理学の言明などが含まれる。これらの言明の扱い方は論理的経験主義者の間でも異なる。第一は倫理学を経験科学に還元する立場、第二は倫理学を情動や感情表現だとする立場、第三は倫理学を無意味だとする立場である。第二は倫理的主観主義であり、M. シュリックなどがこの立場である。第三は情動主義であり、A. J. エアなどがこの立場である。それに対して第一はノイラートなどの立場であるが、ミザクによれば、これはデューイに近いと言う。

論理的経験主義内部には諸種の意見対立があった。一つは言明の有意義性の基準に関わる経験の捉え方に関する対立である。選択肢としては現象論的解釈と物理主義的解釈がある。しかし現象論的解釈では確実性は確保されるが、私的経験を他者に伝えることができない。他方物理主義的解釈では知識を確実な基礎の上に置くことができない。また論理的経験主義は有意義性の基準を実証可能性に定位するが、その意味も一義的ではない。過去、未来、他人の心的状態についての言明は決定的に実証可能ではない。科学の法則は普遍言明であり、また所謂、傾性語句は仮定法や反事実的条件文を使わないと分析できない以上、決定的に実証可能ではない。さらに理論的語句は観察不可能なので、有意義ではなくなる。これら諸種の困難から、論理的経験主義はプラグマティズムに接近していった。

ここでミザクは論理的経験主義者とデューイを比較する。ミザクによれば、科学の実験的方法を支持しつつ諸科学の統一を目指した点で、両者は共通していると述べる<sup>38)</sup>。実際デューイは論理的経験主義者が主導した叢書『統一科学の百科全書 (*Encyclopedia of Unified Science*)』第一巻に、ノイラート、カルナップ、B. ラッセル、N. ボーア等とともに「社会問題として

の科学の統一 (“Unity of Science as a Social Problem”)」を寄稿しているし、同叢書中の一卷として「評価の理論 (*Theory of Valuation*)」を書いている。つまりデューイは論理的経験主義の厳格な思考法を共有しなかったが、統一科学の理念を共有した。

次に倫理的問題について考えてみよう。デューイの倫理学は「科学的世界観のうちに価値を定位」しようとするものである。それは論理的経験主義者に多かった倫理的主観主義、情動主義とは異なる。しかし前述のようにノイラートは比較的デューイに近い立場であり、「世界が次第に科学的になると、世界は社会革新的であろう」<sup>39)</sup>と考えた。

しかしミザクの立論から、デューイが論理的経験主義を厳しく批判した理由は、必ずしも見えてこない。デューイは論理的経験主義を「新スコラ主義」として厳しく批判し、晩年の論文集『人間の問題 (*Problems of Men*)』では、哲学が哲学者の問題を扱うことから人間の問題を扱うためのオルガノンに変わる必要性を訴えた。現在の論脈に即して言えば、「哲学者の問題」は論理的経験主義が扱う問題、「人間の問題」はプラグマティズムが扱う問題ということになる。

プラグマティズムと論理的経験主義の類似性にも関わらず、デューイが後者を強く批判した理由について、ミザクはM. ホワイトに依拠しつつ、二つの点を指摘する。第一は、1940年代、リベラリズム、共産主義、プラグマティズム、実証主義は政治的、個人的レベルで対立していたということである。つまりデューイの論理的経験主義批判は政治的、個人的レベルの対立から生じている。第二は方法論上の対立であった。論理的経験主義者の方法は非歴史的であり、この点でデューイの方法とは異なっていた。逆に論理的経験主義者は厳格な論理的方法を採用したが、デューイの方法には論理的厳格さが欠けていた。デューイの論理的経験主義批判には、政治的・個人的対立、方法論的対立があったものの、それ以上に哲学的類似性が大

きかったというのがミザクの見解である。

さてミザクの立論を支えている今一つの主張は、プラグマティストの中に、パースと論理的経験主義を媒介する哲学者が存在したということである。ミザクがそうした哲学者の一人として挙げるのがCh. モリスである。モリスはG. H. ミードの教え子であり、科学が哲学と民主政治の核心だと考える点でデューイに追随した。同時にモリスはヨーロッパで論理的経験主義者と交わった。1930年、オックスフォードで開催された第七回世界哲学会でシュリックはウィーン学団の基本的立場を発表したのだが、この哲学会にはモリスをはじめアメリカ合衆国からネイグル、クワインが参加した<sup>40)</sup>。ミザクによれば、モリスは二つの点で論理的経験主義とプラグマティズムを橋渡した。一つは、二つの哲学が科学的精神への傾倒を共有している点を強調したことである。もう一つはパースの記号学と科学のための精密な言語を構築しようとしたカルナップの企てに、並行関係を看取したことである。

しかしミザクがモリス以上に、プラグマティズムと論理的経験主義の橋渡し役として重視するのはC. I. ルイスである。ミザクの理論構成は次のように要約できる。第一にルイスは、ハーバード大学時代、パースの影響下にあった。つまりルイスはパースのプラグマティズムを部分的に継承した。第二にルイスと論理的経験主義者との間には思想的親近性があった。第三にルイスは次世代の分析哲学者ークワイン、N. グッドマン、セラーズ、R. ファース、R. チザムなどに影響を与えた。この主張が成り立てば、パースのプラグマティズムはルイスを経由して後の分析哲学的プラグマティズムに流れ込む。

これら三点のうち第二の点については、ルイスが論理学—特に様相論理学の体系化を行ったこと、ルイスとシュリックやカルナップは思想的に接近していること、エアの『言語・真理・論理 (*Language, Truth, and Logic*)』はルイスの『心と世界秩序 (*Mind and the World*

Order)』の影響を受けていることなどが根拠とされる。実際多くの哲学者にとって、ルイスは「論理的経験主義によって牽引された偉大な実証主義の流れの一部」<sup>41)</sup>だと見なされた。

いっぽう第一の点については、ルイスにとって論理的経験主義による経験の意味に関する検証可能性基準は強すぎることに、またルイスは知識を経験によって完全に基礎づけるという考えを持たなかったと主張される。ミザクはルイスの立場を「パースとカントの一種の結合」「パースを通して濾過されたカント」<sup>42)</sup>と特徴づける。この主張の意味を検討して見よう。

一般に経験主義は、我われの信念が無媒介的な感覚与件の連言から演繹可能である場合に、当の信念が基礎づけられたと考える。しかしルイスは「単なる直接的感知 (direct awareness) による知識などは存在しない」<sup>43)</sup>と述べた。何故なら直接的感知自体は知識ではなく、常に「言語化不可能 (ineffable)」<sup>44)</sup>なものだからである。このルイスの主張をカントの立場に引き付けて述べると、直接的感知つまり感覚の多様それ自体は知識を構成せず、それが概念と結びついて判断が成立する場合に初めて知識の資格を得る、ということである。ただしカントはアプリアリな総合判断、つまり直接的感知に相当する確実性を備えた判断に拘った点で、依然として合理主義的であった。しかしルイスはパースの可謬主義を引き継ぐので、カントのアプリアリな総合判断を認めない。このルイスの立場が「パースを通して濾過されたカント」と形容されているものと思われる。

ルイスの「プラグマティックなアプリアリ」という概念は、カントのアプリアリな総合判断の換骨奪胎である。カントは総合的でありながらアプリアリな知識を依然として求める点で合理主義的であった。しかしアプリアリがプラグマティックに解釈されるならば、感覚の多様を秩序づける概念枠組み自体が目的に応じて選択された可変的なものになる。

最後にルイスがパースのプラグマティズムを分析哲学に媒介したという主張に関わる第三の

論点、つまりルイスは次世代の分析哲学者に影響を与えたと言う論点について検討しよう。この立論を支える一つの証拠として、ミザクは、ルイスがクワインに巨大な影響を及ぼしたことを挙げる。ハーバードでクワインがルイスの講義を受けた時、クワインはルイスの認識論に関する講義内容をルイス独自ものではなく、教科書的な内容だと思なしたため、クワインは、ルイスの影響を受けたと認識していなかった。そこでミザクはD. デイヴィドソンの、次のような言明を受け容れる。すなわちクワインの「自然化された認識論はC. I. ルイスの核心に極めて近い。カントに始まり、ルイスを経てクワインに至る筋道が現実にあることを、クワインがどの程度知っているかは分からない」<sup>45)</sup>。デイヴィドソンによれば、クワインの認識論は分析的-総合的の区別を差し引いたルイスである。ただしクワインは多くのプラグマティストとは異なり、倫理、政治、芸術、宗教、法などを全体論的認識論から除外する点では、プラグマティズムの枠から外れる。

以上のようにミザクは、パース的プラグマティズムの正統がモリス、ルイス、クワインへと媒介される物語を描くが、もう一人重視するのがW. セラーズである。セラーズはローティ、さらにブランダムやJ. マクダウェルといった現代のプラグマティストにも影響を与えた。セラーズのプラグマティズムに対する貢献は「規範的なものに意味を与える自然主義」<sup>46)</sup>を確立しようとしたことである。

「規範的なものに意味を与える自然主義」は、いっぽうでは真理と道徳的義務に関する過度に記述主義的見解を否定する。他方では科学を、有機体と環境の調整を行う規則被支配的 (rule-governed) な行動体系を構築する営みと見なす。科学は当の規則を絶えず変更しようとするが、時として変更不可能に思われる規則に突き当たる。しかしセラーズは「所与の神話 (the myth of the given)」の批判者であるから、変更不可能に思われる規則で以て知識を基礎づけない。何故なら知識や科学が合理的なのは、そ

れらが基礎をもつからではなく、自己訂正的だからである。ミザクはこの合理性概念を、パースに結びつける。

本章の検討を総括しよう。ミザクのプラグマティズム思想史の第一の特徴は、Ch. ライトとパースの思想をプラグマティズムの正統とし、デューイとジェイムズ—特にジェイムズを周辺化することである。第二に論理的経験主義とプラグマティズムの思想的親近性を強調することである。この主張は二つの方向から正当化される。一つの方向は論理的経験主義者の思想が、プラグマティズムに接近するということである。もう一つの方向はプラグマティズムの中で論理的経験主義の思想に近い人びとが存在したと主張することである。具体的にはモリスやルイス、特にルイスを介してパース的プラグマティズムが保持され、次世代の分析的プラグマティストに移行する。具体的にはルイスの思想的系譜はクワイン、セラーズに繋がり、彼らを通して現代のブランダム、マクダウェルなどに至る。

論理的経験主義とプラグマティズムの思想的親近性に基づく、ミザクのパース主義的なプラグマティズム思想史解釈は、どの程度妥当性を有するのだろうか、また仮にミザクの解釈が成立したとして、それは代表的なプラグマティズム思想史解釈のなかで、どのような位置を占めるのだろうか。以下では要点を絞って検討する。先ず指摘したいのは、ミザクの解釈は第一章で検討した代表的なプラグマティズム思想史解釈の何れとも異なる特徴を有することである。パースをプラグマティズムの正統としてジェイムズを排撃する点、プラグマティズムと論理的経験主義を一体化する点、モリスやルイスといった陰に隠れがちなプラグマティストに光を当てた点、20世紀を通じてプラグマティズムが一貫して活動的だったと主張した点はユニークである。問題はミザクの解釈を支える根拠が、どの程度妥当かである。

第一にミザクによるジェイムズ排除の可否について、前章とは異なる視角から再検討しよ

う。ジェイムズは哲学に「パーソナルなもの」を持ち込んだ。ミザクは、これを評価しない。しかし我われはミザクとは異なる見解もっている。我われはメディーナとウッドが指摘する、現代哲学における真理論の「規範的転回」から考察を始めよう。

真理論の規範的転回とは、現代哲学における真理論が真理の値打ちへの問いに変化したことを意味する<sup>47)</sup>。メディーナとウッドによれば、真理への問いを「真理の規範性」の問いに、つまり「真理はペイするか、引き合うか」という問いに変えたのはニーチェとジェイムズである<sup>48)</sup>。この問いに対して二人は正反対に解答した。すなわちニーチェにとって真理はペイしない。真理とは「錯覚であることを忘却してしまった錯覚」であり、真理への意志は人間が群れをなして行動する社会的必要から生じた嘘をつく義務である。他方ジェイムズにとって真理はペイする。真理は善の一種であり、我われに幸福をもたらす。

「真理はペイするか、引き合うか」という問いは、第一章での哲学史的考察を踏まえるならば奇異なものではない。第一章で述べたように、カントとともに「知ること」の本性は「明瞭に見ること」から諸表象の秩序づけに変化した。真理は諸表象の秩序づけの客観性の問題になった。カントにとって当該の客観性はアプリオリな認識構造によって保証されるのだが、次第にカント的な考え方は維持できなくなった。ジェイムズにとって、諸表象の秩序づけはプラグマティックな観点から行われるのであり、ジェイムズにとってその観点とは、諸表象の秩序づけの結果が我われに幸福をもたらすかどうかであった。これは認識問題に対する、カント以後の正当な—主意主義的な—代案の一つだと考えられる。

ただし前述のように、ジェイムズは、すべての知識は我われに幸福をもたらす場合に真だとは述べていない。ジェイムズは、ローティ的言えば、我われの最終的ポキャブラリーの選択場面でだけ「信じる意志」を主張したし、パト

ナムの的に言えば、発見の文脈でだけ「信じる意志」を主張し、正当化の文脈では証拠主義の立場に立った。ミザクはジェイムズにおける「信じる意志」に含まれる問題提起を見ることなく、それをジェイムズによる証拠主義の拡大解釈に過ぎないと切り捨てるが、その前にジェイムズの問題提起に納得できる反論をすべきである。

第二にパースをプラグマティズムの正統とみなし、パースの影響を受けた人びとが連綿として続いたかのようなプラグマティズム思想史把握の妥当性を検証してみたい。我われの見立てでは、この点についてのミザクの把握には問題が多い。有り体に言えば、ミザクは主要なプラグマティストの思想のうちに、無理やりパースの影響を読み取ろうとする姿勢が顕著である。若干の例を見てみよう。

先ずルイスについて。パースのルイスへの直接的影響が大きかったという積極的証拠は見出せない。ルイスは1929年の論文で、パースはアメリカ哲学の伝説的人物であって、その影響はジェイムズとJ. ロイスを除けば限定的だと述べている<sup>49)</sup>。そこで影響の度合いを弱めて、二人の思想が類似していると解釈してみよう。ミザクが挙げる一例は、「与件 (the given)」の理論である。ルイスは、論理的経験主義の認識論的基礎づけ主義に近い思想の持ち主と見なされてきた。しかしミザクは「ルイスは基礎づけ主義的思想を明確に否定する」<sup>50)</sup>と述べる。前述したように、その根拠は、与件が認識の対象ではないことである。認識の対象は与件の解釈であり、当の解釈は常に誤りうる。ミザクはルイスの非基礎づけ主義を主としてパースに結びつける。しかしこれは間違いである。何故なら非基礎づけ主義や可謬主義は、ある程度プラグマティストに共有された主張だからである。

次にクワインについて。前述のようにミザクはデイヴィッドスの主張を受け容れて、クワインの自然化された認識論がルイスに近いと述べる。ミザクの立論では、クワインはルイスを媒介にしてパースに繋がる。我われはこの解釈にも同意できない。クワインの論文「自然化され

た認識論 (“Epistemology Naturalized”)]では、経験主義に立脚する基礎づけ主義的認識論が否定され、その代わりに心理学や言語学と協力して、感覚受容器への貧弱なインプットから三次元的な物理的世界の構築に至る過程の記述的研究が置かれる。この記述的研究は、パースの規範学としての論理学よりは、デューイの「知識の自然史」としての論理学に近い。ただしデューイの「知識の自然史」はヘーゲルの自然主義化であって、厳密にはクワインの「自然化された認識論」と同一ではない。J. マーゴリスは、クワイン及びその影響を受けた人びとを「自然化論者 (naturalizer)」と呼んで、デューイの自然主義から区別する<sup>51)</sup>。自然化論者によれば、真理に関わる説明は究極的に因果的であり、因果的説明は物理的なものの因果的集合によって制約されるが、デューイはこの主張に与さない。以上から、クワインが直接、間接にパースの強い影響下にあるとはいえない。

本章では紙幅の都合上、ルイスとクワインだけを取り上げたが、他の多くの哲学者に関しても同様のことが言える。少なくとも「パースからルイスを経てクワインに至る、ピンと張った一本の線」<sup>52)</sup>があるという主張を正当化する証拠はない。

第三にミザクのプラグマティズム思想史解釈を支えている、論理的経験主義とプラグマティズムは思想的に親近性があるという主張を検討しよう。論理的経験主義は20世紀前半、自然科学、社会科学、数学的論理学などの発展の影響を受けたヨーロッパ大陸の一団の哲学者と科学者の中から発展した。いっぽうプラグマティズムを見ると、パースは化学と数学的論理学、ジェイムズは医学と心理学、デューイは心理学、G. H. ミードは社会心理学、ルイスは数学的論理学の専門家でもあった。二つの哲学は、科学への傾注と経験主義という共通の基盤を有する。1930年代以降、論理的経験主義者がアメリカ合衆国に移住するようになると、若い人びとが論理的経験主義に魅了されたのも偶然ではない。M. マーフィによれば、論理的経験主

義が持ち込んだものは、「デューイの曖昧さやウッドブリッジの不確かさに慣らされていたアメリカの学生を驚嘆させる明晰さ、厳格さ、使命感を帯びた熱意だった」<sup>53)</sup>。

しかし論理的経験主義とプラグマティズムには異なった思想的背景も存在する。ここではローティの所論を参考にしよう。ローティは1950年頃に始まり1970年ごろに完成した、初期分析哲学から後期分析哲学への移行過程の代表的論考として、ウィトゲンシュタインの『哲学探求 (*Philosophische Untersuchungen*)』、クワインの「経験主義の二つのドグマ (“Two Dogmas of Empiricism”）」、セラーズの「経験主義と心の哲学 (“Empiricism and the Philosophy of Mind”）」の三作を挙げる。これらのうちセラーズの論文を「分析哲学をそのヒュームの段階から、そのカントの段階に先導する試み」<sup>54)</sup>だと評する。ここでカント的段階とは「概念のない直観は盲目である」というカントの洞察であり、それに対してヒュームの段階では「概念のない直観」が認識の基礎とされた。カントの洞察は、直観は概念による組織化が行われる論理空間に定位され、正当化される場合にだけ知識となりうるということである。

論理的経験主義は認識問題に関するヒュームの段階の現代版だと言える。クワインの経験主義の二つのドグマ—分析的と総合的、観察と理論の二元論—の否定、セラーズの「与件の神話」の否定は、ヒュームの段階からカント的段階への移行を促す要因であった。プラグマティズムはヒュームの段階からカント的段階への移行後の経験主義と言える。

ローティによれば、カント的段階はヘーゲルの段階に進化する<sup>55)</sup>。ヘーゲルの段階では、概念による組織化が行われる論理空間が社会的推論実践の過程を通じて形成過程にあると捉えられる。論理的経験主義における「経験」は“Erlebnis”や“Empfindung”に対応し、その立場は認識論的基礎づけ主義、表象主義であるのに対して、プラグマティズムの「経験」は“Erfahrung”に対応し、その立場は認識論的非

基礎づけ主義、推論主義だと言うことができる。また論理的経験主義が科学—特に自然科学を特権化するのに対して、プラグマティズムは全体論的である。以上の検討から、論理的経験主義とプラグマティズムが思想的に親近性をもつと言い切ることは難しい。

本章の結論としては、プラグマティズムを「近代分析哲学の進化」という視角から構築するとか、パース—ルイス—クワイン—セラーズと繋がる正統的なプラグマティズム思想史の系譜があると言いきることができない。とはいえ、ミザクの解釈には従来にない独自性が認められる。そこで本論の最後に、ミザクによるパースの真理概念解釈と、第一章で検討したプラグマティズム思想史の代表的解釈における真理概念解釈を比較検討することを通して、ミザクのプラグマティズム解釈の位置を確定したい。

#### 第4章 ミザクによるパースの真理概念解釈とその妥当性

ミザクのパース解釈は、真理概念を中心にしている。我われの考えでは、プラグマティズムを真理中心主義的に捉えるか、真理中心主義の克服の試みと捉えるかによって、自ずと異なるプラグマティズム思想史解釈が導かれる。結論を先取りすれば、パースを初め、ミザクやハーバーマス、パトナムは真理中心主義的であり、ジェイムズ、デューイ、ミードを初め、ローティ、ブランダムなどは自由中心主義的である。以下ではこの主張を証明したい。

周知のように、パースの真理概念は、無限に続いた探求の理想的限界において、探求者集団が合意に至るように運命づけられている信念と規定される。パースにおける真理は、目的論的運動が収斂する地点で成立する。しかしこの規定は、様ざまに批判されてきた。例えば多様な信念が最終的に一致するという保証はないとか、探求の理想的限界とはどのようなものかが明らかではないと批判されてきた。

ミザクはパースの真理概念を再解釈すること

によって、こうした批判を回避しようとする。それによれば、先ずパースは真理概念の分析的定義を与えようとしているのではなく、実践のなかで真理が果たす役割を明瞭化しようとしているだけだと言われる。真理の対応説は真理の形而上学的説明であるが、パースは、真理を探究実践との関連で明瞭化している—「ある主張をすること (making an assertion)」と「それは真だと主張すること (claiming that it is true)」を結びつけている—だけだと言うのである。その結果、真理概念は次のように明瞭化される。すなわち「ある信念は、どれほど我われの探求を追求したとしても、取り消すことができないか、改善されないか、期待はずれに終わることがないならば、真である (“A belief is true if it would be indefeasible, or would not be improved upon, or would never lead to disappointment, no matter how far we were to pursue our inquiries”)]<sup>56)</sup>。

パースの規定は目的論的進化論に基づいているが、ミザクの再定式化には次のような利点があるとされる。第一に、探求が、例えば地上の生命の絶滅などによって、早く終わりを告げるという可能性に出くわすことはない。第二に仮説上の探求の終わりが何を意味するかを述べる必要がない。第三に信念が最善であることより合意が大事だと考える必要がない<sup>57)</sup>。

ミザクによるパースの真理概念の再定式化が、パース自身の真理概念と等価であると判断することは難しい。ミザクは前述したパース批判を回避するため、パースの真理概念の形而上学的含意を削ぎ落とし、それをデフレ主義 (deflationism) に近いところまで、内容空虚化を進めているように見える。そこで、ミザクによって再解釈されたパースの真理概念を他の真理概念と比較検討することによって、ミザクによる再解釈の特徴を明らかにして見よう<sup>58)</sup>。

第一に引用符消去主義 (disquotationalism) との関係を考えてみる。引用符消去主義は、真理の機能が引用符の消去に尽きると主張する。すなわち ‘p’ is true if and only if p。P. ホー

ウィックによれば、‘is true’の本質は存在しないので、‘is true’の内容を完全に捉えるためには、引用符消去図式の無限系列を作る必要がある。例えば ‘Snow is white’ is true  $\equiv$  Snow is white & ‘Tronto is the north of Buffallo’ is true  $\equiv$  Tronto is the north of Buffallo  $\equiv$  etc. ホーウィックにとって、「真理」には純粋性があるので、それは実証、指示、意味、成功、論理的含意などという概念から独立して規定されなければならない。それに対して、ミザクは真理を非形而上学的にする方法は、それを他の具体的なもの—人間の行為とか態度—と結びつける必要があると主張する。したがって「真理」は単に言明 p を強調する方法とか、論理学の円滑な展開以上の機能をもつ。

第二に文代理主義 (prosententialism) との関係を考えてみる。この立場によれば、‘is true’は反復の煩雑さを避けるために、文の代理として機能とする。次の会話を例にとろう。

Bill: Did you hear that Icabod quit his job?

Jim: If that’s so, he has more time to play tennis.

Sam: I believe that it’s true—let’s see if he can play this afternoon.

このうち ‘that’ so’ と ‘it’s true’ は、‘Icabod quit his job’ の代理として機能している。文代理主義によれば、‘is true’の機能は文の代理に尽きるのであり、それ独自の属性をもたない。それに対してミザクは、‘is true’の文代理的機能を認めるが、それに加えて ‘is true’には、p について推測したり、夢見たり、期待するのではなく、十分な理由や証拠があるという意味が含まれていると主張する。

第三に超主張可能性理論 (superassertibility theory) との関係を考えてみる。一般に極小主義 (minimalism) は、真理が言語、思想、実在の深い関係を規定するという考え方を退ける。しかし C. ライトは、引用符消去主義を部分的に受け容れながらも、真理にはそれ以上の

機能があると考えられる。すなわち 'p' が真だということは p だと主張することであり、さらに p だと主張することは、一定の基準や規範を満足するものとして p を是認するということである。これは 'p' is true を、'p' は「保証付きの主張 (warranted assertion)」だと立言することに近い。しかしライトによれば、'p' が真であることには、それが「保証付きの主張」だというだけでなく、その主張が綿密な精査を任意に閉じるとか、情報を広範に付加しても保証されるということを含意する。これが「超主張可能性」と言われる。

ミザクによれば、ライトの「自然主義的屬性理論家 (the naturalist property theorist)」的な理論は、ミザクの解釈するパースの真理概念に近い。しかしライトの理論は一つの点で、パースとは異なる。すなわちライトによれば、真理述語は「超主張可能性」を意味するが、個々の文にその属性が付与される基準は多元的であるのに対して、パースは基準の多元性を否定する。ライトによれば道徳的言説の真理は最小限の基準を満足した超主張可能性であるのに対して、物理学の言説は高度な基準を満足した超主張可能性である。ライトの理論は真理述語に関する多元論である。その理由はライトが、その真理概念に基づいて実在論-反実在論論争に対処しようとするからである。つまり低い基準を満たす真理は反実在論、高い基準を満たす真理は実在論へと振り分け可能である。それに対してパースの立場は真理概念に等級を認めない。

これまでの考察を纏めよう。先ずパースの真理概念は目的論的進化論のモデルに基づいて構築されているが、その理論に対しては従来多くの批判が行われてきた。ミザクはこの批判を回避するために、パースの真理概念から批判される諸要素を抜き取って、それを非形而上学化しようとする。ただしミザクによって再解釈されたパースの真理概念は、パースを参照系としたミザクの真理概念という色彩が強い。またバーンスタインが指摘するように、ミザクの再定式化にも次のような問題点がある。すなわち「も

し字義どおりにミザクの再定式化を受け取るならば、実際の『真なる信念』について語ることはできない。何故ならどのような現在の信念も『手に負えない経験と論証』によって、将来覆されるかもしれないからである」<sup>59)</sup>。とはいえミザクの意図は、デフレ主義に近い地点まで真理概念を、いわば軽量化しつつも、探求を規制する理念としての真理の有効性を維持することである。

これまで検討したパース及びパースを参照系としたミザクの真理概念を、第一章で検討した、プラグマティズム思想史解釈の諸類型における真理概念と比較検討して見よう。先ずプラグマティズム思想史解釈の左派であるローティと比較しよう。ローティにとってプラグマティズムはプラトン主義終焉後の小文字の哲学 (philosophy) の代表であり、究極的な根拠、基礎、本質の欠如した世界における種の自己創造を基本的価値とする哲学である。ローティの中心課題は「真理を中心的価値とした全文化的伝統」<sup>60)</sup>の克服であった。真理は「人間的自由を拡大する」<sup>61)</sup>という目的に対する制約と見なされる。第一章で言及したように、真理は人間的自由に対する制約だと最初に告発したのがニーチェである。ニーチェにとって真理は「錯覚であることを忘却してしまった錯覚」であり、人間が群れをなして行動するという社会的必要から生じた嘘をつく義務に他ならなかった。

ローティにとって真理に関する興味深い理論など存在しない。探求の目的は真理の獲得ではなく、「欲しいものを手に入れる」「現状を改善する」「できるだけ多くの聴衆を説得する」「できるだけ多くの問題を解決する」など多くのものがある<sup>62)</sup>。真理に残された唯一の機能は「警告的用法 (cautionary use)」である。つまり仮に p に対して社会全体のコンセンサスがあったとしても、p の終局性に対して警告を発するとき、「p は真ではないかもしれない」と言う場合がある<sup>63)</sup>。

ローティのプラグマティズム思想史解釈が、

ミザクの解釈と対極にあることは既に見た通りである。同じことは、二人の真理に対する基本的態度—ミザクは真理中心主義、ローティは自由中心主義—にも反映されている。

ミザクとローティを二つの極とした場合、比較的ローティに近いプラグマティストとして挙げることができる人は誰だろうか。我われの見解では、ジェームズやデューイは比較的ローティに近い。ジェームズ真理論の特殊主義、主観主義はミザク、タリスらのパース主義者から強く批判されるが、究極的な知的、道徳的問題に対するジェームズの主意主義には、ニーチェの反真理主義とともに重要な問題提起が含まれている。

次にデューイの真理論を見てみよう。『論理学 — 探求の理論 (Logic: The Theory of Inquiry)』の中で、デューイは「保証付きの言明 (warranted assertion)」「保証付きの言明可能性 (warranted assertibility)」「真理」の三つを区別した<sup>64)</sup>。これらのうち「保証付きの言明」とは探求の結果、正当化された言明であり、この言明のもつ特性が「保証付きの言明可能性」である。デューイは未来に向けて不断に自己更新される探求過程を重視し、その過程における知識の機能を「保証付きの言明可能性」と呼んだ。

デューイは「保証付きの言明」「保証付きの言明可能性」とは別に、パースの真理概念を受け入れた。しかし探求の理想的限界という虚焦点 (focus imaginarius) へと向かう収斂モデルのパース的真理概念は、探求を未来に向けた不断の自己更新の過程と見なすデューイの探求理論とは両立し難い。我われの基本的見解では、デューイの探求理論にとってパースの真理概念は、それほど重要な意味をもたない。

第一章で挙げたプラグマティズム思想史の諸類型のなかで、ローティに比較的近い真理概念は、ブランダムに見出される。ブランダムは「真理は哲学において重要な説明的役割を果たす概念ではない」<sup>65)</sup>と述べる。ブランダムは「～は真である」を文の代理的機能しかもたな

いと見なす。「真理」ではなく「推論 (inference)」が基本語句と見なされる。ブランダムは社会的な言語的推論実践の創造的、自律的展開を重視するのであり、その点で恩師ローティの見解に比較的近い<sup>66)</sup>。しかしブランダムはローティのロマン主義的側面を受け継がない。ブランダムによれば、ロマン主義とプラグマティズムは、ともに「第一の啓蒙」の主知主義に対する反動である。しかしプラグマティズムはロマン主義のように、思考、経験、科学に対する感情、直覚、芸術の優越性を主張しない。「プラグマティズムは抽象的な言うこと (abstract saying) よりも知的的な行い (intelligent doing) で表現される、知的と言うよりも実践的な理性概念を提供する。変わることのない普遍的原理の支配よりも、柔軟性と順応性が、その理性概念の顕著な特徴である。それはプラトンの理性であるよりも、オデュッセウスの理性である」<sup>67)</sup>。以上、真理概念を基軸とした場合、ミザクの理論の対極にはローティがおり、ローティに比較的近い位置に古典的プラグマティストのジェームズとデューイ、現代のプラグマティスト、ブランダムがいる。

いっぽうミザクに比較的近いのはパトナムとかハーバーマスといったカント的プラグマティズム (der kantische Pragmatismus) の立場に立つ人びとである。カント的に言えば、「知ること」は傍観者の視座から非言語的実在を精確に表象することではなく、表象連関を客観的に秩序づけることである。カントにとって当該の客観性は超越論的主観に具備された諸機能によって保証されるが、ハーバーマスはこのような主観を認めない。人間はつねに既に歴史的・時間、社会的空間に巻き込まれている。しかし同時に「有限な主体は、自らを世界内にあるものと見なすべきだが、同時に世界産出的自発性を完全に失うことなしに」<sup>68)</sup> 世界内部的でなければならない。つまり有限な主体は「内側からの超越 (Transzendenz von innen)」の力を持たなければならない。

ハーバーマスの真理概念に即して、「内側か

らの超越」の意味を寸考してみよう。ハーバーマスの出発点は、歴史的時間と社会的空間に つねに既に埋め込まれた多数の人びとから構成される言語共同体である。真理の問題は言語共同体における正当化実践から独立に解決することはできない。現実の言語共同体では社会的正当化や保証付きの言明しか獲得できない。しかし社会的正当化や保証付きの言明を真理と同一化するならば相対主義に陥るので、二つを関連づけるとともに区別するという課題を解決しなければならない。

一つの解決策は、「真理」を「理想的正当化」とか「理想的言語共同体における合意」と解することである。こうすれば真理は正当化と結びつくと同時に、「理想的正当化」であることによって、「社会的正当化」から区別できる。「理想的正当化」という真理概念はパース的な「理想的主張可能性 (ideale Behauptbarkeit)」という真理概念に近い。

しかしハーバーマスは、パースの真理概念を受け容れない。何故なら①言明は正当化されるから真なのではなく、真だから正当化されるのであり、②究極的合意という理想はパースの可謬主義と相容れないからである。ここまでの認識では、ミザクとハーバーマスは一致する。しかしパースの困難を乗り越えるための方策では、両者は異なる。ミザクはパースの目的論的な定式化を避けるとともに、デフレ主義的な真理論への配慮を見せる。それに対してハーバーマスは、生活世界における反省と科学的探求の相互関係の検討から、真理と正当化の関係についての結論を得ようとする。生活世界における反省は強い行動確実性への要求に支配されている。反省は速やかに終息しなければならない。それに対して科学的探求は特定の正当化共同体を脱中心化し、あらゆる可能的共同体における受容を指向する。その結果、科学的探求は論争的妥当請求を無際限に仮設的に扱う「組織化された可謬主義 (der organisierte Fallibilismus)」<sup>69)</sup>になる。

ハーバーマスは生活世界における反省と科学

的探求の異なった特徴を混ぜ合わせることによって、真理と正当化の問題に決着をつけようとする。第一に科学的探求は実践的な発生連関や使用連関から完全に独立した営みではなく、生活世界に根差した営みなので、特定の時と場所での終息という生活世界における反省の特徴を引き継ぐ。ただし科学的探求における「特定の時と場所での終息」は脱中心化、理想化されて、無際限に続くかもしれない社会的正当化過程を規制する虚焦点とされる。これが真理の意味になる。つまり真理は理想的な社会的正当化ではなく、社会的正当化を規制する理念である。第二に生活世界における反省の実践的性格は、ともすると独断主義を招来しがちである。しかし科学的探求の「組織化された可謬主義」が生活世界に反映されると、性急に結論に至るのではなく、多様な見解を検討し、客観的根拠を重んじる方向に向かう。

本章の考察を纏めよう。真理概念に焦点を定めてプラグマティズム思想史の諸類型を比較検討するならば、最左派には真理中心主義を克服しようとしたローティがおり、その比較的近くにはジェイムズとかデューイといった古典的プラグマティストと、ローティの立場を合理主義化したと言えるブランドムの思想がある。ジェイムズを除くと、こうした人びとはヘーゲル主義的な指向性をもつ人びとである。彼らは自由、推論、創造性を重視する。

ローティと反対の極にはミザク、ハーバーマスやパトナムがいる。ハーバーマスはパースの真理概念を受容しながらも、それが維持可能なように修正を加えている。彼らの立場はカント的プラグマティズムと言える。ミザクの真理概念もカント的プラグマティズムに比較的近いが、真理に関するデフレ主義、また経験主義の伝統への配慮を見せている。

## 結 論

本論では、プラグマティズム思想史に関するミザクの研究に批判的検討を加えつつ、古典的プラグマティズムと分析哲学的プラグマティズ

ムを包摂するようなプラグマティズム思想史解釈の枠組みを模索した。この課題を果たすために、本論では四つの課題を立て、各々を検討し、一応の結論に達した。

第一の課題は従来のプラグマティズム思想史研究の代表的類型を概観し、ミザクの研究をその中に暫定的に位置づけることであった。我われが得た知見では、プラグマティズム思想史解釈は①メナンド、クロッペンバーグのように思想史的方法を使って、絶対主義への反動、不確実性の思想とするもの、②ブランダム、バーンスタインのようにドイツ観念論の発展、第二の啓蒙などを鍵概念とするもの、③ハーバーマスのようにポスト形而上学的思考、脱超越論化の一形態と捉えるもの、④ローティのようにポスト・プラトン主義の、ポスト・大文字の哲学の思考の一形態と捉えるものに大別される。

ミザクの解釈は、上述のどれとも異なる。プラグマティズムは近代分析哲学の発展の一翼を担うものとして捉えられる。さらにパースのプラグマティズムがその哲学の正統と捉えられ、ジェイムズとデューイ、特にジェイムズがプラグマティズムの正統から排除される。

そこで第二章ではプラグマティズムのパラダイムとして、パース、ジェイムズ、デューイの基本的主張を比較検討しながら、パースをプラグマティズムの正統とすることの可否を問うてみた。ミザク、タリスなどのパース主義的プラグマティストがジェイムズを排撃するのは、その特殊主義と主観主義であり、パースよりも広い、形而上学的主張を内含したプラグマティズム解釈である。しかし我われの解釈では、ジェイムズのプラグマティズムには固有の哲学史的意義があり、ミザクはその意義に十分な検討を加えていない。

次にデューイとの関係についてであるが、ミザクはジェイムズほどにはデューイに対して否定的ではない。ミザクがデューイに対して最も否定的なのは、「知識の自然史」というデューイの論理学観に対してである。しかしこの点に関しても、スリーパー、ストゥア、J. マーゴ

リス、D. L. ヒルデブランドなどは、むしろパースの規範学としての論理学に対して問題を提起している<sup>70)</sup>。その点でミザクのジェイムズ、デューイ排除は一つの見解ではあるが、十分な説得力があるとは言えない。

第三章ではミザクのプラグマティズム思想史解釈の特徴に焦点を当て、批判的に検討した。ミザクのパース主義的なプラグマティズム解釈の大きな特徴は、プラグマティズムと論理的経験主義の「驚くべき類似性」を指摘し、パースからルイス、モリス、クワイン、セラーズと続く連綿たる系譜が存在すると主張することである。ミザクの解釈は魅力的ではあるが、その解釈の妥当性を十分に証明できていないというのが我われの結論である。

そこで最後に、仮にミザクの解釈に一定の妥当性が認められると仮定して、それがプラグマティズム思想史解釈の何処に位置づけられるかを、プラグマティズム思想史解釈の各類型の真理概念を比較検討しつつ考察した。何故ならミザクのパース解釈はその真理概念を中心としているからである。先ずローティの解釈がミザクと対極にあることが明らかになった。何故ならローティの哲学は「真理を中心的価値とする全文化的伝統」の克服を根本的意図としているからである。真理への収斂ではなく、人間的自由による自己創造こそがローティの基本的価値である。ローティの立場に比較的近いのは古典的プラグマティストではジェイムズとデューイ、現代のプラグマティストではブランダムである。これらのプラグマティストは、ジェイムズを除けばヘーゲルの影響を受けているという共通点をもつ。

ミザクの解釈に近いのはハーバーマスやパトナムといった「カント的プラグマティスト」である。しかしミザクはプラグマティズムをカントよりも古典的経験論や分析哲学と結びつけて解釈する。その点でミザクは、「カント的プラグマティスト」以上に経験主義の伝統に近い。

これまでの考察を踏まえて、新たなプラグマティズム思想史構築のための視座を何処に求め

るべきであろうか。プラグマティズムの基本的思潮は自然主義である。また代表的なプラグマティズム思想史解釈の類型に見られるように、プラグマティズムはカント、ヘーゲルを中心とするドイツ観念論の発展形態でもある。特にデューイ、ローティ、ブランダムの経験概念は、イギリス経験論の「経験」ではなく、ヘーゲルの「経験」に近い。その意味でプラグマティズムには歴史主義的な側面がある。我われにとってプラグマティズム思想史を構築するのに適した視座は、プラグマティズムを自然主義的な面と歴史主義的な面の総合への道程とすることである。その意味でブランダムがプラグマティズムの語彙を「自然主義と歴史主義の総合」として特徴づけているのは適切である<sup>71)</sup>。この観点からプラグマティズム思想史を構築するのが、次の我われの課題となる。

#### 注

- 1) 加賀裕郎「プラグマティズム思想史の構築に向けて」『現代社会フォーラム』第9号、2013。この小論では Michael Bacon, *Pragmatism: An Introduction*, Polity Press, 2011 / Robert B. Brandom, *Perspectives on Pragmatism: Classical, Recent & Contemporary*, Harvard University Press, 2011 / 岡本裕一朗『ネオ・プラグマティズムとは何か—ポスト分析哲学の新展開』、ナカニシヤ書店、2012年を中心に検討した。
- 2) C. ウェストは、エマスンにプラグマティズムの淵源を見さえする。Cf. Cornel West, *The American Evasion of Philosophy: A Genealogy of Pragmatism*, Macmillan, 1989.
- 3) Cheryl Mizak, *The American Pragmatists*, Oxford University Press, 2013.
- 4) Robert Brandom, *Perspectives on Pragmatism: Classical, Recent, & Contemporary*, p. 35.
- 5) Louis Menand, *The Metaphysical Club*, Farrar, Straus & Giroux, 2001.
- 6) James Kloppenberg, *The Uncertain Victory: Social Democracy and Progressivism in European and American Thought 1870-1920*, Oxford University Press, 1986. 以下の論述は、拙論「W. ジェームズとJ. デューイ」『H シジウィック研究—現代正義論への道』(行安茂編)、以文社、1992年に負う。
- 7) Brandom, *op. cit.*, p. 36
- 8) Richard Bernstein, "Hegel and Pragmatism", *The Cambridge Companion to Pragmatism*, ed. by Alan Malachowski, Cambridge University Press, 2013.
- 9) *Ibid*, p. 110.
- 10) *Ibid*, p. 111.
- 11) ブランダムはヘーゲルの立場を「合理主義的プラグマティズム (rationalist pragmatism)」と呼び、それを自らの立場と同一化する。いっぽうブランダムは古典的プラグマティストの立場を「道具的プラグマティズム」と呼び、これを批判する。ブランダムにとって、規範性をもった公共的、社会的認識実践は一定程度独立して自己展開する。それに対して古典的プラグマティストは、当該の社会認識実践の道具的性格を強調する。この点がブランダムによる批判の対象になる。しかしバーンスタインは、ブランダムはパースのプラグマティズムを誤解していると見なす。何故なら「パースのプラグマティズムは推論の意味論に基づく規範的プラグマティズムだ」(*Ibid*, p. 119)からである。我われとしてはパースの規範的プラグマティズム自体に対して、プラグマティズム的自然主義との関連で、一定の問題点を見出している。この点については次章で考察する。
- 12) Jürgen Habermas, *Nachmetaphysisches Denken: philosophische Aufsätze*, Suhrkamp, 1988.
- 13) Habermas, *Wahrheit und Rechtfertigung*, Suhrkamp, 1999, S. 186.
- 14) Richard Rorty, *Philosophy and Social Hope*, Penguin Books, 1999, p. 1.
- 15) Isaac Nevo, "Richard Rorty's Romantic Pragmatism", *Pragmatism: From Progressivism to Postmodernism*, ed. by R. Hollinger and David Depew, Praeger, 1995, pp. 290-291. なおこの箇所の論述は、加賀裕郎「自然主義的プラグマティズムの展開」『理想』669号、理想社、2002年、pp. 50-51に負っている。
- 16) Richard Rorty, *Consequences of Pragmatism*,

- University of Minnesota Press, 1982, p. 161.
- 17) Misak, *The American Pragmatists*, p. 175.
  - 18) Rorty, *Philosophy and the Mirror of Nature*, Princeton University Press, 1979.
  - 19) *Ibid.*, p. 365.
  - 20) Cf. *Ibid.*, pp. 365-372.
  - 21) *Ibid.*, p. 367.
  - 22) William James, *Pragmatism and The Meaning of Truth*, introduction by A. J. Ayer, Harvard University Press, 1978, p. 97.
  - 23) Misak, *op. cit.*, p. 60. 以下で言及するジェームズの主意主義 (voluntarism) については次の拙論を参照のこと。加賀裕郎「W. ジェームズと J. デューイ」『H. シジウィク研究—現代正義論への道』、271 ページ以下。
  - 24) James, *The Will to Believe and Other Essays in Popular Philosophy (The Works of William James)*, Harvard University Press, 1979, p. 117.
  - 25) Robert B. Talisse, *A Pragmatist Philosophy of Democracy*, Routledge, 2007, p. 10.
  - 26) Vgl. Habermas, *Nachmetaphysisches Denken*, SS. 48-49.
  - 27) Cf. John Dewey, *Essays in Experimental Logic*, Dover, 1953, pp. 317-318.
  - 28) ジェームズに関する我われの見解の一端は、加賀裕郎「便宜としての真理—ジェームズの真理論—」『現代哲学の真理論—ポスト形而上学時代の真理問題』(加賀裕郎他編)、世界思想社、2009年、pp. 110-123を参照のこと。
  - 29) Hilary Putnam, *Renewing Philosophy*, Harvard University Press, 1992, p. 195.
  - 30) E. B. McGilvary, Bladly, G. Watts Cuningham, C. I. Lewis, and Ernest Nagel, "A Symposium of Reviews of John Dewey's Logic: The Theory of Inquiry", *The Journal of Philosophy*, Vol. 36, 1939, p. 578.
  - 31) Misak, *op. cit.*, p. 116. なお以下の論述の詳細については、拙著『デューイ自然主義の生成と構造』晃洋書房、2009年、pp. 292-308を参照のこと。
  - 32) R. W. Sleeper, *The Necessity of Pragmatism: Dewey's Conception of Philosophy*, Yale University Press, 1986/J. J. Stuhr, *Genealogical Pragmatism: Philosophy, Experience, and Community*, State University of New York Press, 1997.
  - 33) Vincenzo Colapietro, "Experimental Logic: Normative Theory or Natural History?" *Dewey's Logical Theory: New Studies and Interpretations*, ed. by Thomas Burke, D. Micah Hester, and Robert B. Tallise, Vanderbilt University Press, 2002, p. 48.
  - 34) John Dewey, *Logic: The Theory of Inquiry (The Later Works of John Dewey, Vol. 12)*, Southern Illinois University Press, 1986, p. 24.
  - 35) Misak, *op. cit.*, p. 156.
  - 36) デューイは『確実性の探求』第四章のなかで、ブリッジマンやA.S. エディントンの操作主義を検討している。Cf. Dewey, *The Quest for Certainty (The Later Works of John Dewey, Vol. 4)*, Southern Illinois, University Press, 1984.
  - 37) Rudolf Carnap, *Meaning and Necessity*, University of Chicago Press, 1956, p. 214.
  - 38) Cf. Misak, *op. cit.*, p. 164.
  - 39) *Ibid.*, p. 168.
  - 40) Cf. Murry G. Murphey, *C. I. Lewis: The Last Great Pragmatist*, State University of New York Press, 2005, p. 218.
  - 41) Misak, *op. cit.*, p. 180.
  - 42) *Ibid.*, p. 182.
  - 43) Lewis, *Mind and the World Order: An Outline of a Theory of Knowledge*, New York, Dover, 1956, p. 37.
  - 44) *Ibid.*, p. 53.
  - 45) Donald Davidson, *Problems of Rationality*, Oxford University Press, 2004, p. 237.
  - 46) Misak, *op. cit.*, p. 219.
  - 47) José Medina and David Wood (ed.), *Truth: Engagement across Philosophical Tradition*, Blackwell, 2005, p. 1.
  - 48) この箇所の論述は加賀他編『現代哲学の真理論』、ii ~ iii ページに負う。
  - 49) C. I. Lewis, "Pragmatism and Current Thought" *The Journal of Philosophy*, Vol. X X VII, No. 9, 1930, reprinted in *Dewey and His Critics*, ed. by Sidney Morgenbesser, Journal of Philosophy, Inc., 1977, p. 32.
  - 50) Misak, *op. cit.*, p. 182.
  - 51) Joseph Margolis, *Reinventing Pragmatism:*

- American Philosophy at the End of the Twentieth Century*, 2002, Cornell University Press, pp. 6-7.
- 52) Misak, *op. cit.*, p. 199.
- 53) Murphey, *op. cit.*, p. 219.
- 54) Rorty, "Introduction" in Wilfrid Sellars, *Empiricism & the Philosophy of Mind*, Harvard University Press, 1997, p. 3.
- 55) pp. 8-9.
- 56) Misak, "Pragmatism and Deflationism", *New Pragmatists*, ed. by Misak, Oxford University Press, 2009.
- 57) Misak, *Truth, Politics, Morality: Pragmatism and Deliberation*, Routledge, 2000, pp.49-50.
- 58) Misak, "Pragmatism and Deflationism", pp. 68-90.
- 59) Richard Bernstein, *The Pragmatic Turn*, Polity Press, 2010, p. 115.
- 60) Rorty, *Consequences of Pragmatism*, p. 35.
- 61) *Ibid*, p. 69.
- 62) Rorty, *Truth and Progress: Philosophical Papers, Vol. 3*, Cambridge University Press, 1998, p. 11.
- 63) ローティの真理論の詳細については、加賀裕郎「真理から連帯へ—ローティの反真理論」『現代哲学の真理論—ポスト形而上学時代の真理問題』（加賀他編）、世界思想社、2009年を参照のこと。
- 64) この問題に関する私見については、拙著『デューイ自然主義の生成と構造』、pp.323-332.を参照のこと。
- 65) Brandom, *Reason in Philosophy: Animating Ideas*, Belknap Press, 2009, p. 158.
- 66) この箇所の記述は加賀裕郎「プラグマティズム思想史の構築に向けて」、p. 59に負う。
- 67) Brandom, *Perspectives on Pragmatism: Classical, Recent, & Contemporary*, p. 41.
- 68) Habermas, *Wahrheit und Rechtfertigung*, S. 9. なおハーバーマスの真理概念の詳細については、加賀裕郎「真理論のプラグマティズム化—ハーバーマスの「カント的プラグマティズム」に関連して—」『文化学年報』第58輯、2009年を参照のこと。
- 69) *Ibid*, S. 255.
- 70) Cf. Joseph Margolis, *Reinventing of Pragmatism: American Philosophy at the End of the Twentieth Century* / David L. Hildebrand, *Beyond Realism and Anti-Realism: John Dewey and the Neo-Pragmatists*, Vanderbilt University Press, 2003.
- 71) Robert B. Brandom, "Vocabularies of Pragmatism: Synthesizing Naturalism and Historicism", *Rorty and His Critics*, ed. by Brandom, Blackwell, 2000.